
 学 会 記 事

第 46 回新潟化学療法研究会

日 時 平成 19 年 6 月 9 日 (土)
午後 3 時 30 分～

会 場 新潟グランドホテル 5F
常磐の間

I. 一 般 演 題

1 妙高病院におけるインフルエンザワクチン接種に関する意識調査

小熊 妙子・佐藤理津子・岸本 秀文
天井 誠*・柳 紀美江*・加藤 克彦*
妙高病院内科
同 薬剤部*

2006 年 10 月以降にインフルエンザワクチンの接種希望者に対し、接種に関する意識調査を行った。回収は小児科 57 人、内科 314 人であった。接種理由としてインフルエンザは怖い病気だと思う、とした回答が多く、家庭内での養育・介護者としての立場を考慮したもの、不特定多数の人との接触を理由に挙げた回答は全体で 3 割を超えなかった。この傾向は観光・接客・サービス業と回答した人の間でも見られた。医療機関の選定に当たり、近いことやかかりつけであることを理由に挙げた回答が多かった。特に小児科においてワクチンの費用を高額と考える人が多かった。心配なこととして小児科ではおよそ半数の回答で副作用を挙げていた。

2 当院で発生したセレウス菌による血流感染 2 症例とその事後対策

近 幸吉・院内感染対策委員会
県立坂町病院内科

平成 17 年 7 月から 9 月にかけて当院でセレウス菌による血流感染症例を 2 例経験した。

〔症例 1〕60 歳女性、胃がん手術後セレウス菌による菌血症を併発した。末梢留置針が感染源と考えられた。BIPM 投与で改善した。

〔症例 2〕81 歳女性、膵癌手術後、急な発熱あり血液よりセレウス菌が検出されセレウス菌による菌血症と診断した。MEPM 投与で改善したものの他の原因で死亡退院となった。院内、委託業者の環境調査で広範囲にセレウス菌が検出され、業者から出荷直前の乾燥した清拭用タオルからも高濃度に検出された。

当院ではこの調査結果を受けて、局所感染リスクの高い症例の清拭にはデスポーザブルタオルを使用していたが、清拭の患者満足度は、低下した。

家庭用電子レンジによる 10 分の照射がセレウス菌芽胞を含むほとんどすべての細菌の無菌化に有効であることが判明し現在は、レンジ照射後タオルを高リスク例には使用している。

3 ACU/MIC を考慮した VCM の TDM 解析に向けて — リネゾリドからの変更症例の検討

伊藤 敦子・継田 雅美
新潟市民病院薬剤部

【目的】PK/PD を考慮した TDM 解析に向け、バンコマイシン投与で効果不十分であった症例について検討する。

【方法】平成 18 年 9 月から平成 19 年 3 月までにリネゾリドを使用した患者を対象とした。そのうちバンコマイシンからリネゾリドに変更になった症例について、バンコマイシン使用時に実施した TDM 解析から AUC/MIC 値を算出した。

【結果】検討した症例は 5 名。AUC/MIC 値は 188.2 ～ 1222.1 であった。

【考察】MRSA の気道感染症では AUC/MIC 値が 345 以上で有効性があったとする報告がある。

今回、5例中4例がAUC/MIC値345未満となりAUC/MIC値が薬剤変更の一つの指標になると考えられた。

【まとめ】当院におけるMIC値は0.5未満、1または2となっており、MIC値が1～2の間におけるAUC/MIC値には大きな差が生じるものと考えられる。したがって、今後はトラフ値、AUC/MIC値および患者の状態、全ての要素を考慮しTDM解析を行っていくことが必要であると思われた。

4 ビアペネム使用症例の検討

— PK/PD理論と臨床効果について —

継田 雅美・鈴木 信明*・小原 竜軌*
塚田 弘樹*

新潟市民病院薬剤部
同 呼吸器科/感染症科*

【目的】カルバペネム系薬はtime above MIC (以下TAM)が臨床効果と相関することが報告されており、ビアペネム(BIPM)においては解析ソフト『オメガモン Ver.2』(明治製菓)が開発されたことから、今回このソフトを用いてPK/PD理論と臨床効果を検討した。

【対象と方法】平成18年5月から19年2月までに*P. aeruginosa*が起炎菌であり、かつBIPMの投与日数が4日以上であった7例9件を対象とした。症例毎に『オメガモン Ver.2』を用いてTAMを算出し、効果との関連性を検討した。

【結果と考察】緑膿菌のMICが8 μ g/mLであった1例を除く6例8件に効果がみられた。肺炎症例における胸部X線の改善は4例中1例のみにみられ、TAMが50%を超える症例であった。TAMが40%を超える症例はすべて何らかの効果が認められ、重症例にはTAM=40～50%必要であると考えられた。

5 ヒト免疫細胞に対するホスホマイシンの作用

大久保猛司・近 幸吉*・西山 晃史
田邊 嘉也**・下条 文武**
山本 達男

新潟大学大学院・医歯学総合研究科・
細菌学分野
県立坂町病院・内科*
新潟大学大学院・医歯学総合研究科・
臨床感染制御学分野(第二内科)**

【背景】ホスホマイシン(FOM)はエポキシ環を有する低分子抗菌薬(ペプチドグリカン合成阻害剤)であるが、近年、抗菌活性以外に宿主免疫の修飾作用が注目されている。臨床では肺膿瘍及び膿胸などの難治性再発性感染症においてFOMの使用による再燃の予防効果が認められており、マウス及び*Pseudomonas aeruginosa*による菌血症モデルにおいてもFOM投与が宿主の生存率を改善する効果が報告されている。しかしながら、FOM投与による抗炎症効果が示唆される一方で、その誘導メカニズムに関しては不明な点が多い。宿主の免疫細胞(多形核球、単核球)の寿命及び表層レセプターは細菌に対する免疫反応の誘導に重要である。Toll-like receptors (TLR)は細菌感染に対する免疫反応のバランスの決定に関与する因子である。特に、細菌DNAとTLR9は抗炎症反応を誘導する。よって、本研究ではヒト末梢血多形核球をモデルとし、細胞の寿命及びTLRの発現に対するFOM処理の影響を検討・考察した。

【方法】ヒト末梢血多形核球をFOM存在下で培養し、計時的にトリパンブルー染色により細胞の生存率を計算した。TLR2, 4, 及び9は細菌成分の認識に関与する。多形核球を*P. aeruginosa*存在下又は非存在下でFOM処理し、total RNAを分離した。TLR2, 4, 及び9の発現をRT-PCRで解析した。

【結果及び考察】(i) FOMはコントロールに比べ、PMNの寿命を短縮した。(ii) PMNをFOMで4h処理することによりTLR2の発現が減少し、TLR9の発現が増加した。この差は18h処理した細胞では見られなかった。(iii) *P. aeruginosa*で